

妻に叱られて②

地域振興券で

妻に叱られたこと

土居 修



いるのを覗き見た瞬間であった。そのときの感動は、忘れようとも忘れられない。



た。あと5ヶ月で還暦を迎える熟女をその気にさせるには、想像を絶する努力が必要であった。

「これに決めよう」「どうして、この色なの？」

「あなたの色じゃありませんか？」

「あなたのお金、どこにあるのよ？」

「地域振興券があるじゃないか、4千円の」

「他の市町村はどれくらいだろうか。とにかく、ありがたい。しかしながら、妻の反応は鈍かった。」

「あなたの艶々した黒髪が好きなのだ。だから、それがいい。私に困るんです。」

島崎藤村が『惜別の歌』で謳いあげた「みどりの黒髪」を例に挙げて、懇願した。

「ぼかじゃないの、まったく」

「なにが、と応じると、「地域振興券、読んだが」と問う。

「いや、みてない」「どうして、読まないのよ。まったく」

叱られているという事は理解できたが、その理由はわからない。重複された「まったく」の意味

を考えながら、辛うじて、「どうしたか」とことばを継いだ。

「ほんとうの、ぼかね、この男は。振興券が使えるのは、11月からだって」

「へえー、そうだったのか」

「そうよ。もう、恥ずかしかったんだから、まったく」

財布にお金があったてよかったという妻のレジでの狼狽ぶりを思い浮かべた。こみあげてくる笑い押し殺すしかない。

ひそやかに溜飲を下げた。だが、使用期限を見落としながら私を叱る妻が、図らずも愛おしくなってきた不思議。

平々凡々と過ぎてゆく日常での珍奇な一コマ。人生また楽しからずや、である。

私も振興券を読んではいなかった。それを受け取った瞬間から使用できるものと思っていた。嘘ではない。ご賢察くださいますようお願いいたします。

第



料理経験もないままに、麺に味をつけて製品化するという無謀な挑戦。一日平均4時間の睡眠。365日無休という凄絶な明け暮れの果てに、1958年(昭和33年)、安藤百福はチキンラーメンを完成させている。材料から器具まですべてひとりで調達。開発の過程では失敗を繰り返しながら少しずつ改善を施していったという。

1966年、視察で訪れたアメリカ合衆国でのこと。あるスーパーマーケットにチキンラーメンを持ち込む。だが、麺を入れるどんぶりが無い。途方に暮れる安藤百福が目にしたのは、紙コップにチキンラーメンを割り入れ、お湯を注いで食べている光景だった。妙案が浮かぶ。世界初のカップ麺の誕生を決定づけた瞬間であった。進取の気概と圧巻の着想。その結晶が世界に誇る日本食となつている。規約上の正式名称である「即席カップ麺」のささやかな成功秘話である。

貧しかった大学時代。東京都北区赤羽西4丁目の坂の上の四畳半の一室。裸電球の薄ら灯りの下で、「奇跡

だ、神業だ」と呟やきながら、カップ麺を食した幾夜の記憶は忘れようとも忘れられない。赤羽駅のホームでの朝夕の立ち食いうどんも私の生命維持には欠かせないので、できないものであったが、それは奇跡でも神業でもなかった。東京の「つゆ」が濃口醤油であることを経験として蓄積していったにすぎない。髪を乾かしながら、スタイリングを完成させるカールドライヤー。別名は、くるくるドライヤー。考案した人物は知らぬとも、それが奇跡であり、神業であると認識したのは、35年前の2月。結婚披露宴の翌朝、高知市内のホテルの一室で初々しい若妻が風呂上りに使っ

たドライヤーは濡れた頭髪を乾かすための機器。付加的な目的として髪型を一定のスタイルに整えるためにも用いられることもあるが、いざずれにしても、両手を作動するしかない。無精な人間にとっては苦痛。受難の機器。だが、カールドライヤーは違う。片手で操作できると知った。奇跡だ、神業だと雄叫びをあげ、愛する女性とともに歩む人生に華やかな夢を紡いだ記憶。

2022年10月中旬。長年にわたり愛用してきたブルーのカールドライヤーがあえなく不燃物となつてしまった。この世のすべてのものは変化する。須崎市の不燃物用ゴミ袋に入れようとした瞬間、不意に『平家物語』の冒頭の一節が思い浮かんだ。